

411 中央大学記事（創立三十年記念式・記念事業記事・維持

基金寄附申込者氏名及び金額）

〔法学新報〕第26巻1（293）号 大正5年1月1日

○中央大学記事

○創立三十年記念式 予報の如く中央大学に於ては去十二月十二日創立三十年記念式を大講堂に於て挙行したるか午後一時半来賓、教職員並に学生一同著席し君か代の奏楽に依りて式を開き先づ学長奥田義人氏登壇左の式辞を朗読す音吐朗朗場を圧し満堂肅然謹聴し

『今上陛下位二即キ給ヘルノ年、正サニ本大学創立ノ三十年

ニ値フ茲ニ本日ヲトシテ記念ノ式ヲ行フ朝野ノ群賢及ヒ本大学関係諸君ノ並ヒニ来臨ヲ辱フセシハ本大学ノ光栄トスル所ナリ本大学ハ明治十八年ニ創立シ初メ英吉利法律学校ト名ケ後東京法学院ト改メ終ニ今名ニ及ヘリ当時歐洲文明東漸ノ勢駸駸トシテ幾ント社会ノ構架を憾震セントセシモ学界ノ情形ニ至リテハ尚ホ渾沌トシテ風雨晦冥ノ中ニ在リ本大学ハ其間ニ特立シテ自ラ視テ至善ト為ス所ヲ行ヒ以テ本大学ノ基ヲ立テタリ自來社会ノ變動曲折頗ル劇甚ニシテ円石ヲ千尋ノ壑ニ転スルノ勢アリ随テ本大学ノ組織経営及ヒ分科課程等ノ上ニ於テモ亦屢々変更増添スル所アリテ毎ネニ時勢ノ進運ト相表裏シ以テ其ノ耳目タランコトヲ務メタリ是ニ於テカ来リテ本大学ニ學フモノ年ニ其ノ多キヲ加ヘ既ニ卒業生ヲ出スコト六千人、而カモ社会ノ活機ヲ把持シテ其ノ學識ヲ發揮シツツアルモノ亦甚少シトセス其ノ能ク此ノ盛ヲ致セシ所以ノモノ固トヨリ本大学関係講師職員諸君尽瘁ノ結果ニ由ルト雖モ亦未タ曾テ本校出身學員諸氏外護ノ力ノ厚キニ帰セスンハアラス余ハ斯ノ嘉辰ニ逢ヒ嘗テ本大学ノ為メニ力ヲ尽サレタル古人諸君ニ対シテ尤モ追思ノ念ニ堪ヘサルナリ抑三十年ノ歲月ハ人生ニ於テ決シテ太短トナササルモ本大学存在ノ悠久タルヘキヨリ之レヲ視レハ殆ント一瞬息ノ間ニ過キササルナリ然ラハ本大学力過去ノ社会ニ対シテ寄与シタル微効ノ窈カニ誇ルニ足ルヘキモノアルト同時ニ亦将来ノ發達ニ於テ大二期スル所ナカルヘカラサルヲ知ル余ハ此ノ機会ニ於テ本大学ヲ眷愛スル朝野ノ諸賢及ヒ本大学関係ノ講師職員學員諸君ニ感謝シ並

ニ尚ホ将来ニ於テ直接間接ニ本大学ノ為メニ一臂ヲ添ヘラレ
ンコトヲ冀フ

大正四年十二月十二日 中央大学学長法学博士 奥田義人

次に法学博士男爵穂積陳重氏、理学博士男爵菊池大麓氏相亜て
巻頭に掲載したる祝辞を述べられたる講師総代法学博士桑田熊
藏氏は左の祝辞を

『維レ大正四年十二月十二日中央大学創立第三十年記念式ヲ
挙ク抑モ我中央大学ハ其初二当リ専ラ法学ヲ教授シ法曹養
成ニ務メタレトモ漸次其規模ヲ拡張シ経済科ヲ設ケ及ヒ商科
ヲ置キ日將月就其構成稍ク備ハリ其卒業者ハ則チ官吏タリ実
業者タリ自由職業者タリ皆各々其所ヲ得復タ能ク国家及ヒ社
会ノ須要ニ応シテ其任務ヲ全クス其進勢駸駸乎トシテ見ルヘ
キモノアリ且此度

天皇陛下御即位大礼アリ億兆懽春ヲ極ムルノ今日ヲ以テ本大
学亦此最モ記念スヘキ時期ニ到達ス是レ豈ニ圭運ノ昌隆ヲ章
カニスルモノナラスヤ茲ニ記念式ニ列シテ誠ニ感激ノ至ニ任
フル無ク謹ミテ祝ス

中央大学講師法学博士 桑田熊藏

次に学員会総代法学博士花井卓藏氏は左の祝辞を

『天皇陛下文徳ヲ誕敷シ武威ヲ載績シ国光中外ニ煌キ惠沢八
埏ヲ潤ス今茲大正四年十一月十日即位ノ大礼ヲ挙ケサセ給フ
三綱張り四維立ツ宝祚ノ隆ナル天壤ト窮リ無シ方此時我中央
大学創立三十年ノ式ヲ行フ欣幸何ヲ以テ之ニ加ヘン惟フニ國
運ノ興隆ハ學術ノ發達ニ伴フ材ヲ養ヒ學ヲ研クノ要豈多言ヲ

要センヤ而シテ是洵ニ聖謨ヲ奉体シ皇猷ヲ養襄スル所以ノ要
道タリ庶幾クハ斯心ヲ以テ心トシ以テ昭代ノ化ニ報ヒ奉ラン
虔ミテ祝詞ヲ述フ

大正四年十二月十二日 中央大学学員法学博士 花井卓藏

次に同森本邦治郎氏は左の祝辞を

『我中央大学ハ本日ヲ以テ創立三十年記念ノ祝典ヲ挙行セラ
ル惟フニ本大学英吉利法律学校ノ名ヲ以テ創立セラレテ以来
当局ノ經營其宜キヲ得校運隆昌規模皇張復タ昔日ノ比ニ非ス
既ニ六千ノ人材ヲ出シ常ニ三千ノ健児ヲ養ヒ今ヤ居然トシテ
斯界ノ重鎮タリ吾人之ヲ思ヘハ欣快ノ情禁スルコト能ハサル
ナリ然リト雖熟々帝國立法、司法、行政各部ノ現状ヲ顧ミレ
ハ国家ノ人材ヲ思フ此秋ヨリ急ナルハナキノ感ナクンハアラ
サルナリ我中央大学タルモノ小成ニ安ンセス宜ク進テ一大發
展ヲ策シ所謂英國學風ノ特質ヲ發揮シ以テ高等教育ノ使命ヲ
全ウシ學生ハ質実ナル校風ノ下ニ刻苦勉勵其才能ヲ研磨スル
ト共ニ専ラ品性ノ陶冶ニ努メ以テ国家有用ノ材タルコトヲ期
セサルヘカラス而シテ吾人學員ハ外ニ在リテ之ヲ翼クルニ吝
ナラサルヘシ聊カ蕪辭ヲ陳ヘテ本大学ノ前途ヲ祝福ス

大正四年十二月十二日 中央大学学員 森本邦治郎

次に同小松林藏氏は左の祝辞を

『我中央大学ハ本日ヲトシテ創立三十年記念ノ盛儀ヲ挙ケラ
ル回顧スルニ本大学創立当時ニ於ケル教科ハ法律學ノ一科ノ
ミ然ルニ我邦文運ノ進展ハ独リ法律ノ普及ヲ以テ足レリトセ
ス是ニ於テカ当局者ハ臨機學制ノ改革ヲ行ヒ今ヤ法律、經濟

及商業ノ三分科相鼎立シ規模整然校勢大ニ張ル其本領ハ即チ空論ヲ斥ケテ実用ヲ旨トシ浮華ヲ戒メテ堅実ヲ尚ヒ以テ活社会ニ処スル活人物ヲ養成スルニ在リ從テ俊英雲ノ如ク集リ卒業ノ後其官吏、公吏若クハ弁護士トシテ活動スル者ノ外或ハ言論界ニ或ハ実業界ニ其他社会ノ上流ニ在リテ各其分ニ応シ利用厚生ノ道ヲ啓キ国家ニ貢献スル者実ニ三千有余名ニ上リ孰レモ世ニ重キヲ為ササルナシ是レ豈ニ教育上ニ於ケル本大学ノ大功ニアラスヤ某等今日既往ヲ追懷シ独リ本大学ノ為メニ其成功ヲ祝スルノミナラス国家ノ為メ亦之ヲ祝セサルヲ得サルナリ

惟フニ世界經濟上ノ大勢ハ漸ク我國民ノ活躍ヲ促シ從テ教育上今後本大学ノ努力ニ待ツモノ少カラス当局者必スヤ茲ニ見ル所アリ機宜ヲ失フコトナク經營画策以テ世ノ期待ニ背カサルヘシ今次ノ記念会ニ当リ諸同人ノ間ニ本大学維持基金募集ノ議既ニ熟シ其事業著著進捗スト云フ然ラハ則チ当局決意ノ存スル所亦之ヲ窺フニ難カラス本大学将来ノ進運期シテ待ツヘキナリ欣喜曷ソ勝ヘム聊カ蕪辭ヲ述ヘテ祝辭ト為ス

大正四年十二月十二日

中央大学學員 小松林蔵

次に同関西支部総代高野兵太郎氏は左の祝辭を

『時維レ寒威凜冽人心正ニ肅靜ニ帰スルノ候 聖上陛下新ニ即位ノ大礼ヲ終ハラセラレ文物典章燦トシテ光輝ヲ添ヘ我皇ノ武威又四海ヲ圧シ大日本帝國ノ世界ニ於ケル信望ハ愈々其重キヲ加フ然レトモ庶政ノ實際ヲ觀レハ憂フヘキモノ甚タ多ク邦家ノ前途ニ於ケル其人材ヲ要スル唯此時ヲ然リトス』

此時ニ当リ我中央大学ハ本日ヲトシ創立三十年記念式ヲ挙ケ内外朝野ノ貴賓堂ニ満チ賀詞祝辭陸續トシテ断エサラムトス同学ノ士誰レカ之ヲ慶幸セサラムヤ某等亦學員ノ列ニ在リ此盛儀ニ逢フテ欣喜措ク所ヲ知ラス而モ謹テ之ヲ思フ帝國ノ現状ハ自ラ教育界ニ於ケル本大学ノ責務ヲシテ益重カラシムルモノナクムハアラス從テ校務ノ企画更ニ一段ノ努力ヲ要スルコト渺シトセス庶幾クハ本大学諸同人決然立テ大ニ校基ノ鞏固ヲ図ルト共ニ盛ニ經綸ヲ事トシ緩急本末其宜シキヲ失ハス且從來ノ學風ニ加フルニ潑測タル元氣ヲ以テシ以テ国家有用ノ偉材ヲ輩出シ綱常ノ維持、國運ノ隆興ニ補ヒアラムコトヲ夫レ既往三十年ノ歴史ハ即チ是レ經營者ニ對スル頌徳表ニシテ大ニ教育界ニ誇示スルニ足ル然レトモ時勢ノ推移ヲ察シ進テ為ス所ナクムハ恐クハ永ク其声誉ヲ繫クコト難カラム聞ク今ヤ六千ノ學員結束シテ起チ母校ノ為メ企ツル所アリト誠ニ機宜ニ適フモノト謂フヘシ豈ニ祝セサルヘケムヤ爰ニ中央大学學員会支部ヲ代表シ一言以テ祝辭ト為ス

大正四年十二月十二日

関西支部幹事奈良地方裁判所檢事正 高野兵太郎

終りに學生總代松岡一衛氏は左の祝辭を

『畏クモ 今上陛下万世一系ノ宝祚ヲ踐ミ御即位ノ大礼ヲ行ハセラレタル年偶々我中央大学創立三十年ニ當リ本日ヲ以テ其記念式ヲ挙ケラル生等此時業ヲ本大学ニ受ケ此盛典ニ列スルヲ得生等ノ光榮何モノカ之ニ加ヘン
回顧スレハ明治維新以降汲汲トシテ泰西ノ文明ヲ移植シ帝國』

ノ内治外交一ツトシテ俊才ヲ要メサルハナシ是ニ於テ先覚相計リ明治十八年本学ノ前身タル英吉利法律学校ヲ設立セラル爾来坤軸転星霜ヲ重ヌルコト茲ニ三十長カラスト雖モ亦短カシトセス而シテ此間六千有余ノ先輩母校ヲ出テ朝ニ野ニ国ノ内外ニ各其天職ニ向テ活躍シ夫ノ民法典実施延期問題ニ刑法改正問題ニ其他社会的な重要問題ニ関シテ屢々奮闘セラレタルハ人ノ善ク知ル所ナリ而モ其事ニ当ルヤ虚心坦懐一点ノ私心ナク眼中唯国家社会アルノミ此レ蓋シ我校風ノ質実剛健ナルニ職由セスンハアラス生等此歴史アリ此校風アル本学ニ受業ス豈ニ感奮励精セスシテ可ナランヤ

今ヤ戦雲欧洲ノ天地ヲ蔽ヒ余殃亦東洋ニ及ハントス其勝敗ノ数何レニ存スルモ戦後ニ於ケル社会百般ノ事物概ネ革新セラリ可キヤ必然タリ生等此時ニ際セシテ各志ス所ノ学ヲ修メ其責任甚タ軽カラサルヲ覚ユ自今学長講師諸先生ノ指導ト先輩学员諸氏ノ援助トニ依リ業成ルノ日大ニ学员タルノ面目ヲ發揮シテ各自ノ本分ヲ尽サンコトヲ期ス聊カ所感ヲ叙シテ祝辞ニ代フ

大正四年十二月十二日 中央大学学生総代 松岡一衛

孰れも破るるか如き喝采声裡に朗読せられ是に於て乎奥田学長は起て来賓に対し鄭重なる謝辞を述べ且講堂の左右高く掲ぐる故菊池穂積両博士の肖像を顧みて故人も定めて今日の盛儀を地下に喜はれつつあらんとて無量の感に打れたるか如く以上を以て厳肅裡に式を終りそれより少憩中校庭に設けられたる「そば」「うどん」「しるい」「だんい」「おでん」「すし」、其

他学長寄贈の祝餅等の模擬店を一時に開きたるに学生を始め千百の人衆思ひ思ひに打寄せて各店共に非常の盛況を呈し宛然戰場にも似たるへき有様にて或は成功者あり或は失敗者あり歓声湧くか如く軍楽隊の劉曉たる音楽と相和して人をして意気揚揚たらしむるものあり斯くて大講堂に於ては余興を開催し海老一派の太神楽、高峯筑風の筑前琵琶、細川風谷の講談等孰れも快哉声裡に演了し聽て来賓並に学员諸氏を二十年記念講堂外三室に設けたる宴会場に案内し立食の饗応に移る既にして宴酣なるや伊藤悌治氏（第一室）、奥田義人氏（第二室）、花井卓蔵氏（第三室）、元田肇氏（第四室）各起て来賓諸氏に対し一場の挨拶を述べ且つ杯を挙げて諸氏の健康を祝せられ之に対して中橋徳五郎、塩谷恒太郎、太田資時、石山弥平、三宅碩夫諸氏の発声にて各室相和して中央大学並に学長の万歳を三唱し談笑の間に各自漸く休憩室又は余興室に復し十二分の快を尽して退散したり然るに学生側に在りては各科学生中思ひ思ひの得意なる隠芸を發揮して数番の余興に孰れも腹を鼓し最後に三枡屋一九の浪花節あり其和氣靄然の裏に散会したるは午後九時に近く当日は学生多数出席ありたるのみならず来賓並に学员諸氏実数数百名に達しさしにも広き大講堂も立錫の余地なく大多数の来賓諸氏か場外休憩室に溢れつつありたるか如きは誠に近來稀に見るの盛会なりと謂ふべく出席者の総員は二千余名に上り其中来賓並に学员の姓名は左に掲ぐるか如し因に当日来会者諸氏には中央大学三十年史一部を贈呈したり尚ほ当日学员会台湾支部、関西支部、京城支部、釜山支部、函館支部、及び日立鉾山

在住學員諸氏、本田常吉、村山儀七、内藤正剛、紀志嘉実、磯貝大二郎、小島宗三郎、熊田幹之介、吉田佐太郎、浜地八郎、岡本卯之助、中谷岩治郎諸氏其地より深厚なる祝電を寄せられたり爰に謹て謝意を表す

乾 孚 志	岩田 唯雄	池田 季雄
池田寅治郎	伊東 知也	井上 広居
伊地知栄蔵	伊藤繁太郎	岩崎 勲
石 大次郎	磯江 潤	磯谷幸次郎
岩田 一郎	石川 文吾	稲田周之助
池田四郎次郎	石山 弥平	石原毛登馬
石井 謹吾	石塚 綱正	飯田延太郎
伊能 宗吉	井上銀左衛門	今泉 来蔵
岩瀬 脩治	飯田 一二	稲木 重俊
稲村藤太郎	稲葉清之助	井上市太郎
石田 孝吉	石神 健三	伊藤 秀雄
伊藤 高義	岩井千代三	井上 武八
石沢久五郎	岩田 匡彦	岩井磯次郎
伊藤 祐治	伊沢 芳郎	石渡 益枝
石渡 信孝	飯塚竜太郎	井上 朗三
岩崎勝三郎	岩本 磐門	乾 喜代八
犬養駒太郎	板倉賢二郎	伊藤 悌治
伊藤 漸	羽田 智証	橋本久太郎
春山 泰治	原 邦造	板東 幸平
畠山 重明	馬場 愿治	原 嘉道

男爵

花井 卓蔵	馬場 鏝一	林 頼三郎
林 茂増	早速 整爾	早川 六郎
早川 重躬	長谷川佐平太	馬場豊三郎
馬場 信一	花本福次郎	林 万作
林 茂樹	原田 武一	服部 世民
浜口 末喜	羽田 実	西 元 禎
西川鉄次郎	西川 一男	西村勘之助
西 森太郎	西谷 清雄	西島 佐吉
穂積 陳重	堀田熊三郎	堀田 芳誉
堀内 健治	細谷鎌太郎	細田 謙蔵
細野 長良	星野 久威	星野 輝廉
堀江専一郎	堀江 秀	堀川寅次郎
堀川 勘吾	堀口六太郎	細野 繁勝
本間 信蔵	穂波 徳明	保坂 昌工
別役 増吉	戸野周二郎	床枝 東洋
鳥居錦次郎	所 銀作	徳光 好文
徳見 広元	徳永清之助	堂本 源吉
常田 力	遠山 茂	戸田 承
外山 辰蔵	外山 福男	東郷 吉彦
千野要之助	千葉 良胤	千葉 彦治
布山 彦一	小野田元熙	岡田 庄作
大沢 真吉	大沢 三樹	太田 資時
岡田朝太郎	岡本芳二郎	荻村 錦太
大岩 峰吉	大島 三橘	岡田 泰蔵

岡田 淳司	岡部 清彦	岡崎 一治	神田 常吉	片岡 幹	梶尾 円平
岡 弁良	小野沢竜吉	小野瀬不二人	梶屋 貞	甲野管一郎	狩野山義一
小野寺文哉	大塚善太郎	大賀 純雄	龜山 慎一	金井弥四郎	金子 誠三
大崎岩之助	小山田 実	小川益太郎	景山 武夫	吉野千代吉	吉田 堯昇
小倉 敬止	尾崎 利中	尾崎 重美	吉野豊次郎	吉田 輝一	吉田 正季
尾川幾太郎	尾畑 喜平	太田 団野	吉村長次郎	吉長 正好	横溝 晋平
大久保竹次郎	大久保住吉	大江權九郎	横山 慶朝	横田 民造	横田 稔
大竹 清七	大塚玉次郎	大島恒治郎	米津 藤一	竹内 平吉	田中 吉雄
大島 義雄	大石 治郎	大石 恒久	高羽惣兵衛	高津敏三郎	田中 隆三
岡田彦次郎	奥田治郎三	奥野 晋	武田鬼十郎	滝村 斐男	玉川 豊吉
恩田熊寿郎	小沢 竹平	小山哲四郎	多田 齋司	高崎 介蔵	高柳覚太郎
奥田 義人	小山 残平	大松 直重	高柳国次郎	高木 国尚	高野 金重
渡辺代五郎	渡辺勘十郎	渡辺佐一郎	高野兵太郎	高橋 勳	高木 栄助
渡辺 澄也	渡辺福三郎	渡辺 方英	高木 善行	武田 明	武 宗太郎
渡辺 英三	渡辺吉右衛門	脇田 安平	武士 忠吾	田中 文蔵	田中 芳雄
川崎安之助	川口木七郎	金子元三郎	田中三喜蔵	田中 利三	田村松之介
加藤 彰廉	加藤彖四郎	加藤 三蔵	田辺 熊一	田知本松次郎	竹内卷太郎
柏原与次郎	金井 延	神崎 東蔵	竹入 益男	竹内 幸次	宗 弘一
加藤 正治	加藤熊一郎	嘉山 幹一	曾根常太郎	園部 悦次	塚原寅次郎
上条 辰蔵	金沢 卯一	片山 寛	土屋 倫啓	土屋 徹一	常川元次郎
川村 貫治	菅野 近一	加藤 準一	筒井雪太郎	釣谷 安二	塚田孫次郎
川島 任司	川久保源治	川手 忠義	辻本友次郎	中島 正司	中尾 芳助
川島 彖夫	川井金一郎	河島 台蔵	中村徳重郎	中川 重政	中島 寛二
河野 秀男	河東田経清	神原国太郎	中島又五郎	永屋 茂	成田 栄信

成瀬澄三郎	長島鷺太郎	中村 元嘉	柳 賢吾	安田 清忠	松尾清次郎
中村 進午	中西 清一	中橋徳五郎	松田 源治	松脇 武輔	松本 辰雄
中山 博道	中山 佐市	中村 弘	松本 風涯	前田 多蔵	増田 雄三
中村 尚義	中村 満	中沢 善助	松浦与三左衛門	前田定之介	前田久次郎
中山峯太郎	中山 米蔵	中村 正臣	前田 米蔵	丸山 熊八	丸毛 重典
長瀬 善隆	永井 透	村上三左男	牧野 賤男	正岡 義光	松本房之助
村田 巖彦	村山 一平	村上 太七	松岡 高明	松永和一郎	松波 孚強
武蔵 康造	馬屋原 彰	上松 泰造	松村 栄	松島 昇	松隈 昌隆
植松 金章	宇田川銀之助	卜部喜太郎	松本 武俊	松本源四郎	松沢 卓規
白田 潔	内海 英吉	内田 清吉	松原 珪二	松岡 元信	松尾參三郎
植木 寿雄	野口本之助	野尻岩次郎	古市 公威	古谷 久綱	古田 兼三
野村 嘉六	野島 勝七	野山麻佐吉	福井 盛太	福岡 秀猪	二上 兵治
草場九十九	草野豹一郎	黒瀬 正弥	深田 鶴松	深堀 福郎	福田 恒得
桑田 熊蔵	桑山 忠孝	工藤 武重	福田根之助	古田 良三	藤谷 久六
口分田成一	口井 勇夫	胡桃 正見	冬野 辰市	小出 五郎	小久保喜七
久保 義郎	久保 秀造	国貞 善一	小島忠一郎	小林丑三郎	近藤 達児
窪田閔太郎	窪田欽太郎	山口 憲	香阪駒太郎	小松 林蔵	小林 半一
山県 鉄蔵	山中隣之助	山田 末吉	小坂宇太郎	小口善三郎	小泉彦三郎
柳川 勝二	柳沢慎之助	矢野 恒太	小泉 矩	小林新太郎	小山 初治
山崎林太郎	山中 兵吉	山田 知晃	小谷田誠次	近藤恵次郎	五島常次郎
山内 一二	山中 友吉	山中国之助	後藤伝兵衛	光明寺内蔵造	古閑 勝
山岸利三郎	山口 貞亮	山原富四郎	遠藤 忠次	遠藤 政蔵	永滝 久吉
矢野勝太郎	矢島 末吉	矢口宰九郎	江藤 直作	江口 賢蔵	江端 留吉
藪内 誠雄	山本角之助	矢淵義太郎	海老原 重	円谷 亀重	越後仁四郎

出口 競	手塚 光貴	手塚彦太郎	三野 頼次	三根谷実蔵	三瓶 覚
手代木祐寿	寺島 元重	寺島 由松	溝部佐一郎	水野 博徳	水島 房吉
寺尾 元彦	有田 温三	秋山 源蔵	水町 新三	嶺田 俊雄	宮部 準次
新居友三郎	荒木 捨作	青木栄次郎	宮地 正彰	宮沢 武七	宮川琴治郎
青木 昌吉	青木 豊吉	青山幾之助	宮崎 三郎	島田 武夫	塩谷恒太郎
青木 治介	新井要太郎	足立唯一郎	清水泰次郎	清水 有国	志村 吉蔵
安部 藤治	安藤 聖二	朝比奈孝一	志村 改輔	志賀 三行	城田鶴五郎
有泉 庚午	秋草 愛一	荒金二郎三郎	城谷 一誠	渋川柳次郎	重信喜太郎
荒木 貞城	天野政次郎	天野 徳也	下川 六郎	椎谷 栄作	椎名 千次
斎藤 二郎	指田 義雄	坂入宗兵衛	篠崎 仙司	七辺格太郎	品川 英一
坂口 武一	坂本 藤八	佐藤 三吾	白鳥保五郎	白井 茂	白石栄太郎
佐藤駒太郎	佐藤 半山	佐藤 忠順	白鹿 金市	島野 金吾	島本幸次郎
佐藤 博	佐藤 清	佐藤 国造	島田徳太郎	柴田 元一	清水千太郎
沢村 直	三枝 寛三	桜田 平治	塩満幸平次	平野猷太郎	平岡万次郎
佐野辰一郎	佐伯 叔作	作田高太郎	平林 政博	平松 市蔵	平田 箴
蔡 浩	佐藤 正之	坂本 万作	土方 寧	樋口 典常	日能脩太郎
男爵 菊池 大麓	男爵 肝付 兼行	木内伝之助	広吉国太郎	東 讓三郎	平井長次郎
木村半之助	北川 銓総	岸 清一	平川松太郎	平城 慈門	平田勝太郎
岸本 源三	木村 時秀	木村 精一	広瀬和四郎	日永 悌三	人見 直善
木村 寿平	喜多 孝治	湯沢真太郎	望月 良彦	元田 肇	森原 嘉逸
三輪 一夫	三宅 長策	三宅 高時	森本邦治郎	森 惣之祐	森 源作
三宅源重郎	水口 吉蔵	宮古啓三郎	森元 貞純	諸留 勇助	男爵 関 義臣
宮田 幸作	宮岡恒次郎	三宅 碩夫	瀬下 清通	関根 平三	関矢 恕一
三浦大五郎	三輪 智	三上 義男	関口 専宇	杉浦 重剛	杉本織之助

杉 程次郎 鈴木宗兵衛 鈴木 庄助
 鈴木 敬義 鈴木 千載 鈴木 常雄
 鈴木 長寿 杉山弥太郎 杉山 虎雄
 杉原丈太郎 杉本 初雄 須原 大助
 須田千五郎

○記念事業記事 去月二十二日午後五時より常任委員会を開催して維持基金募集に関する打合せ及報告等ありたり

又学長より左の五氏に地方委員を囑託したり

村上庸吉(大阪)、川田謙二(大阪)、妹尾与志夫(大阪)、津田武(鹿児島)、久木田叶(鹿児島)

○維持基金寄附の申込ありたる諸氏(前号の続)の氏名及金額左の如し

前号所掲中一金参百円(口数五口) 林頼三郎君は一金四百式拾円(口数七口)の誤、一金六拾円(口数一口) 白井茂君は一金百式拾円(口数二口)の誤、一金五拾円(一時払) 志賀三行君は一金百式拾円(口数二口)の誤に付茲に是正す
 一金六拾円(口数一口) 市埴 善吉君
 一金六拾円(口数一口) 井上市太郎君
 一金百式拾円(口数二口) 今田鎌太郎君
 一金六拾円(口数一口) 伊藤五郎治君
 一金六拾円(口数一口) 堀 竹雄君
 一金壹千円(十个年賦払) 鳥居諦次郎君
 一金六拾円(口数一口) 戸田 承君
 一金式百円(十个年賦払) 岡田 淳司君

一金六拾円(口数一口) 片山 寛君
 一金六拾円(口数一口) 鹿野清次郎君
 一金式拾円(二回払) 門脇 滋樹君
 一金壹百円(五個年賦払) 梶尾 円平君
 一金百式拾円(口数二口) 横田 民造君
 一金参百円(口数五口) 横田 秀雄君
 一金参拾円(卅个月賦払) 生井 耕造君
 一金六拾円(口数一口) 奈佐 忠行君
 一金百八拾円(口数三口) 中村 進午君
 一金六拾円(口数一口) 村田 祐治君
 一金拾円(月賦払) 村山 儀七君
 一金百式拾円(口数二口) 久保 秀三君
 一金式百五拾円(月賦払) 山崎林太郎君
 一金三拾円(月賦払) 柳田 新治君
 一金式百円(十回払) 松木 弘君
 一金壹千円(十个年賦払) 藤井 乾助君
 一金百式拾円(口数二口) 古橋 新一君
 一金五拾円(月賦払) 古井 辰次君
 一金百式拾円(口数二口) 光明寺内蔵造君
 一金六拾円(口数一口) 古閑 勝君
 一金三拾円(三个年賦払) 赤沼 正豪君
 一金六拾円(口数一口) 足立 重雄君
 一金式百円(十个年賦払) 佐藤 三吾君
 一金六拾円(口数一口) 佐久 節君

一金百貳拾円 (口数二口)
一金六百元 (口数十口)
一金貳百元 (十个年賦払)
一金六拾円 (口数一口)
一金六拾円 (口数一口)
一金五拾円 (五个年賦払)
一金六百元 (口数十口)
一金貳百元 (十个年賦払)
一金百貳拾円 (口数二口)

桜田 平治君
佐藤 正之君
溝部佐一郎君
三浦大之助君
三浦吉兵衛君
三井 純一君
森本邦治郎君
諸留 勇助君
鈴江秀太郎君
(以下次号)